



## 可燃ごみ量の計測がいよいよスタート

シリーズ「ごみ減量をいかにして成功させるか」④

3月1日から、有明ひまわりセンターが本格稼働します。また、みやま市との建設負担割合を決める可燃ごみの計測もスタート。これまで以上に資源ごみの分別や生ごみの水切りなど、可燃ごみの減量にご協力をお願いします。

【問】市廃棄物対策課 ☎72・1334

### いよいよ3月から建設負担金の算定開始

昨年11月から試運転が始まっている有明ひまわりセンター。建設費約12.1億円のうち、約85億円は、柳川市とみやま市で負担します。両市の負担割合は、3月から1年間で両市から出される可燃ごみの割合で決定。いよいよ3月から、負担割合を決める重要な1年が始まります。

1月の市内の可燃ごみの量は1162トン（前年同月1228トン）でした。前年同月と比べて5%の削減です。一方、1月のみやま市の可燃ごみの量は417トン。可燃ごみの割合は、柳川市73.6%、みやま市26.4%でした（下グラフ）。皆さんの協力のおかげで、可燃ごみは順調に減っています。これまで以上

に資源物の分別や生ごみの水切りなどを心がけて、ごみの減量へ協力をお願いします。

### 月曜から金曜まで受け付けルールを守って利用しよう

- 場所 有明ひまわりセンター（橋本町、☎75・1766）
- ごみの受付日時 毎週月～金曜、午前8時30分～午後0時15分、午後1時～4時
- ※月～金曜が祝日のときも受け付けます。
- 料金 10kg当たり200円
- 受け付けるごみ 可燃ごみ、草木、布団、家具などの可燃粗大ごみ
- ※プラスチックやガラス、陶器、金属などは受け入れできません。
- 注意事項 金属やびん、ガラスなどの不燃物を燃やしやすいごみ袋に入れて出すと、焼却

### 1月の可燃ごみの量

柳川市	みやま市
1162トン	417トン



前年同月より5%削減したよ。みやま市も減っているから引き続きごみの分別を頑張ろう

の際に灰の中に残ってしまい、焼却機械の故障の原因となります。不燃物は必ず分別してそれぞれ「缶・金属類」、「びん・ガラス類」の日に出示してください。

これ一つで簡単にできる💡

### 生ごみの水切りに便利な「立つ水切り袋」

市に出される可燃ごみの成分のうち、約55%は水分。水分が多いと効率的に焼却できず、焼却施設に負担がかかってしまいます。また、可燃ごみの減量のためにも生ごみの水切りは重要です。右の写真のように、市内のホームセンターやスーパーに自立式の水切り袋が売られています。袋に穴が空いているので、捨てる前に水を絞りやすくとっても便利です。安価で購入できるので、ぜひ、お試ください。

また、生ごみの減量化には電動生ごみ処理機も有効です。市は、市内の店舗で電動生ごみ処理機を購入する人を対象に、購入額の3分の2を補助しています。詳しくは、市生活環境課 ☎77・8483 へ問い合わせてください。



生ごみ処理機



下に穴が開いていて便利

## 「川角太閤記」の著者は田中吉政に仕えていた?!

「天下布武」を合言葉に、全国統一目前まで迫った織田信長。その業績を記したものととして、太田牛一著『信長公記』は有名です。

信長の右筆だった牛一が書いていることから、信頼に足る史料とされてきました。

しかしこの『信長公記』の、後を記した書物があることは、あまり知られていません。

タイトルを『川角太閤記』と、一般には言います。筆者が直接、学生時代に教えた乞うた桑田忠親先生は、『川角太閤記』の作者は田中吉政（筑後柳河藩32万五千石余の初代藩主）の家臣・川角三郎右衛門ではないかと推測していました。

「本能寺の変」から約40年たった、元和7（1621）年頃に成立していたとすれば、うなずけることのように思います。世に、『太閤記』と名のつく書物は複数ありますが、おおむね

豊臣秀吉の一代記という形にまとまっています。

ところが、『川角太閤記』は他と趣を異にするかのように、タイトルに「太閤記」とあるものの、内容は『信長公記』の続編を意識したものになっているのです。とくに、明智光秀が信長を弑した「本能寺の変」については、生き延びた光秀の家来2人からの、聞き書きをもとにしたと述べています。

『国史大辞典』の桑田先生による記述に従うと、『川角太閤記』は「その文体から見ると、上司の命令によって書き上げたか、または、何びとかの依頼によって記述したものらしく、史実を描写し再現させようとした苦心のあとがうかがわれる。作為の潤飾のない、素朴な古記録」と評価されていました。『太閤記』の中で、最も有名な小瀬甫庵の『太閤記』のように、完成された形式を持つものではなく、大村由己の『天正記』の

ように、秀吉の勲功宣伝に、とりわけ熱心な記述とも異なる内容が『川角太閤記』でした。

寓意も誇張もなく、その執筆態度においては、太田牛一の『大かうさまぐんぎのうち』のあとをゆくもの、と評価されてきたこの作品、川角三郎右衛門に執筆を命じたのが田中吉政であったならば、彼は何をこの作品に書き残したかったのでしょうか。

『川角太閤記』は、『信長公記』

のあとを受けて、天正10（1582）年の光秀の謀叛から筆を起し、秀吉の死後、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで筆を置いています。

立花宗茂がいよいよ空白の20年で、柳川を水郷の別天地に一変させた筑後国主の吉政は、もつとその人となり知られてしかるべき人物かもしれませんね。

■文Ⅱ 加来耕三

（つづく）



田中吉政公之像